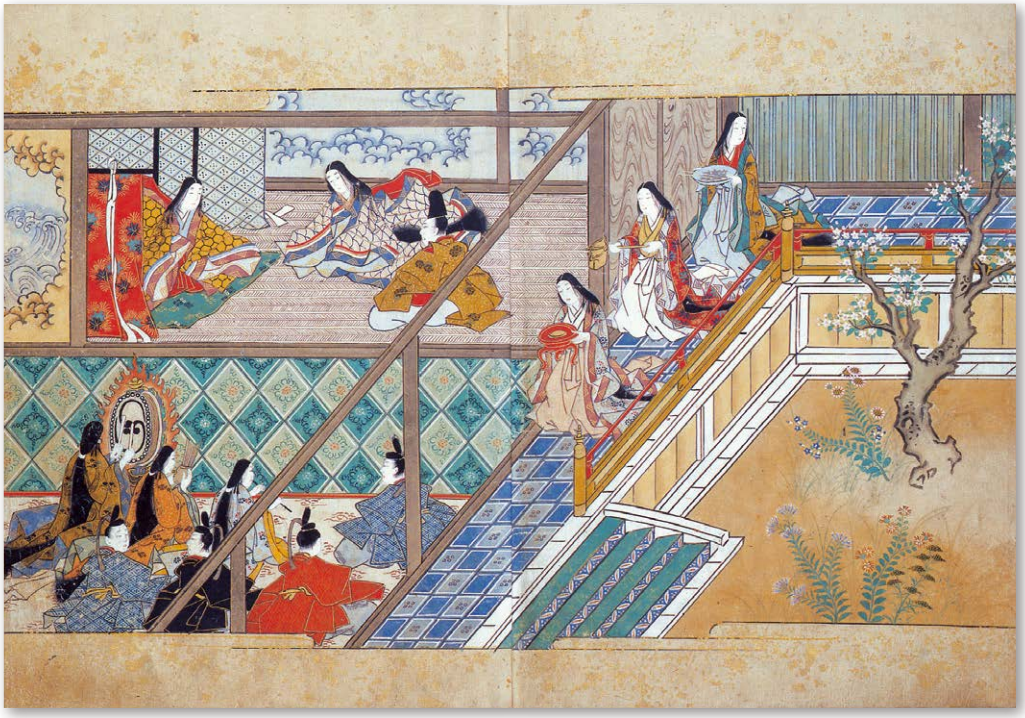
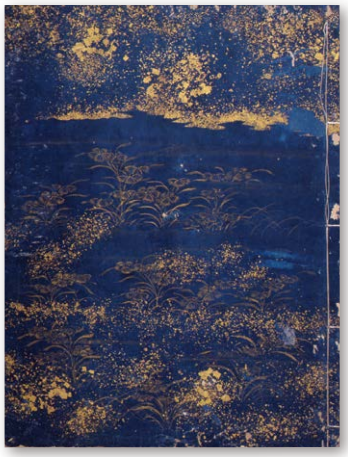
NO.96

蓬左

HÔSA





鶴の草子（８頁参照）

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

蓬左文庫典籍研究会の活動

蓬左文庫典籍研究会について

名古屋市蓬左文庫には、徳川家康の没後尾張徳川家に分与された「駿河御譲本」や、初代尾張藩主義直の蔵書など、学問的・文化的に価値のある典籍が数多く所蔵されている。また、江戸時代中期以降のものではあるが、尾張名古屋の古代学を支えた学者たちの蔵書や編纂物も残されており、これらの典籍は日本の古代史研究上大きな役割を果たしている。

しかし、蓬左文庫所蔵の典籍は、重要文化財に指定された金沢文庫本『続日本紀』や『侍中群要』が有名である一方、詳細な調査が行われていないものも数多く見受けられる。例えば、蓬左文庫は二三〇冊もの分量がある「日次記」を所蔵しているが、蓬左文庫の蔵書目録に記載されている情報は、年代（天暦元年〔九四七〕から仁治三年〔一二四二〕）と編著者（二条良基編）、書写時期（江戸中期）および寸法のみであり、この「日次記」がどのような典籍であるかということは、これらの情報からだけでは分からないのが現状である（図1）。

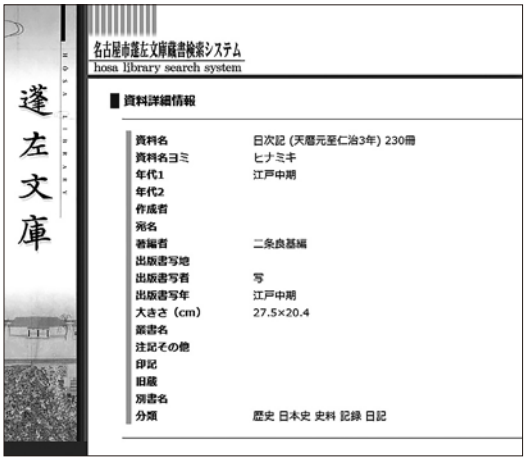


図1　「日次記」の書誌情報

そこで、二〇一七年三月に、名古屋市立大学教授吉田一彦氏・愛知県立大学教授丸山裕美子氏・筆者・名古屋市立大学研究員浅岡悦子氏・同大学大学院博士後期課程手嶋大侑氏に、蓬左文庫長鳥居和之氏・同学芸員木村慎平氏を加え、蓬左文庫典籍研究会を発足させ、蓬左文庫が所蔵する日本古代史関係の典籍を調査することとした。同年四月以降、原則として月一度の割合で調査を進めており、十月には大幸財団の人文・社会科学系学術研究助成を受けることができた。また、二〇一八年には名古屋大学大学院博士後期課程の芝田早希氏を研究会の一員として迎え、調査の一部を担当していただいている。

蓬左文庫所蔵「日次記」について

昨年度末から今年度にかけて、集中的に調査を進めているのが前述の二三〇冊本「日次記」（請求番号六六－一、図2・3）である。この「日次記」は、全体が甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十種類に分類されており（十干分類）、それぞれ目録一冊（合計一〇冊）が附されている。なお、蓬左文庫には三五冊本の「日次記」（請求番号二四－三）も所蔵されているが、これは二三〇冊本のうち、甲集全体と乙集の一部のみの零本である。

「日次記」附載の目録によれば、甲集第一から

図2　「日次記」の箱　名古屋市蓬左文庫蔵

第一二までは『九暦』から院政期までの古記録、甲集第一三からから丙集第四までは『台記』、丙集第五から辛集第一六までは『玉葉』、辛集第一七から壬集第二五までは『玉藻』、壬集第二六から癸集第八までは『明月記』、癸集第九から第一九までは『玉藻』・『良実記』・『実経記』、癸集第二〇以下は各種の部類記となっている。ただし、目録の記載と実際の内容は一致していない部分もあるので、調査では「日次記」の全冊を繙いて、それぞれの部分が誰を記主とする古記録なのかを確認している。

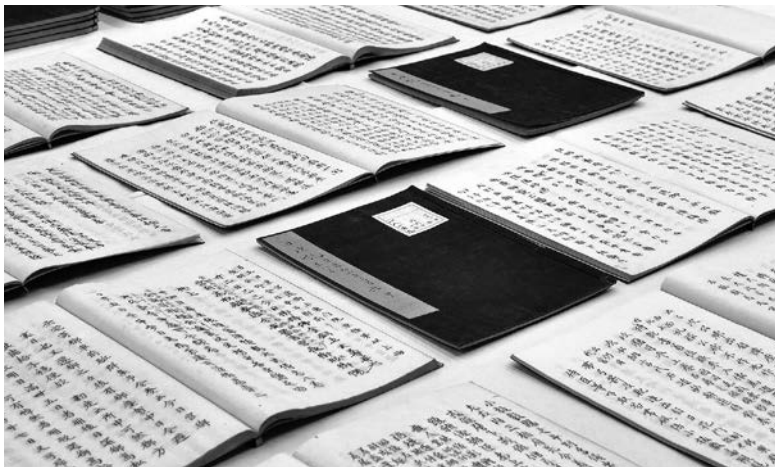


図3　日次記　名古屋市蓬左文庫蔵

「日次記」の調査の中間報告

「日次記」の写本は、蓬左文庫だけではなく、国立公文書館（内閣文庫本、三三五冊本・二二〇冊本・一一七冊本）、国立国会図書館（一五四冊本）、東洋文庫（岩崎文庫本、二二九冊本・一〇冊本）、宮内庁書陵部（一冊本・一三冊本）でも所蔵している。そこで、まず本年七月に筆者が岩崎文庫二二九冊本を実見したところ、蓬左文庫二三〇冊本と同様に十干分類であり、方形朱印「旧和歌山徳川氏蔵」が捺されていたことから、紀伊徳川家の旧蔵本と判明した。また、蓬左文庫所蔵『明月記』（請求番号二四-四）附属の土井能登守書状・水戸光圀書状によれば、尾張藩所蔵の「日次記」は幕府の文庫である紅葉山文庫の所蔵本を書写したものであり、水戸光圀が書写を求めていたという。以上の点からすれば、紅葉山文庫本を共通の祖本とする「日次記」を、徳川御三家がそれぞれ書写して所蔵したことが想定できる。

ところが、共通の祖本とおぼしき紅葉山文庫本は、現在の所まだ発見できていない。本年八月、台風十三号が日本列島に接近する中、吉田・丸山・浅岡・手嶋・芝田各氏とともに再び東京に赴き、内閣文庫の三本全てと国会図書館一五四冊本を調査したのだが、内閣文庫の三本はいずれも十干分類ではなく、鶏・狗・猪・羊・牛・馬・人・穀に員外を加えるという、前漢・東方朔『占書』の記述に基づく分類方法が取られていた。つまり、これら三本はいずれも紅葉山文庫本ではありえないことになる。また国会図書館本も、分類方法自体は不明だが、各冊の原装表紙に記載されていた冊数が内閣文庫二二〇冊本と一致するので、内閣文庫三本と同系統である可能性が高い。つまり、東京調査で紅葉山文庫本を確認するはずが、別系統の「日次記」に遭遇してしまったことになる。

「日次記」のシンポジウム

以上のように、「日次記」の調査は困難を極めている。ただし、新たに判明した事実も多く、得られた知見を一度整理しておく必要があることから、蓬左文庫典籍研究会では、来たる二〇一九年の一月十三日（日）に、蓬左文庫本「日次記」を題材とするシンポジウムを開催することにした。当日は、東京調査以降に判明した新たな事実・課題や、紙数の都合で本稿に盛り込めなかった事柄も含め、「日次記」を多方面から検討していく予定である。多くの方々にお越しいただき、議論に参加していただければ幸いである。

（愛知大学准教授　廣瀬憲雄）

展示室1・2

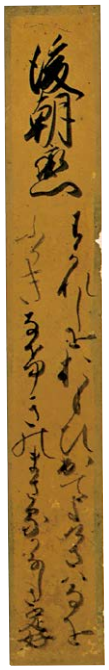
企画展

書は語る ―30センチのエスプリ―

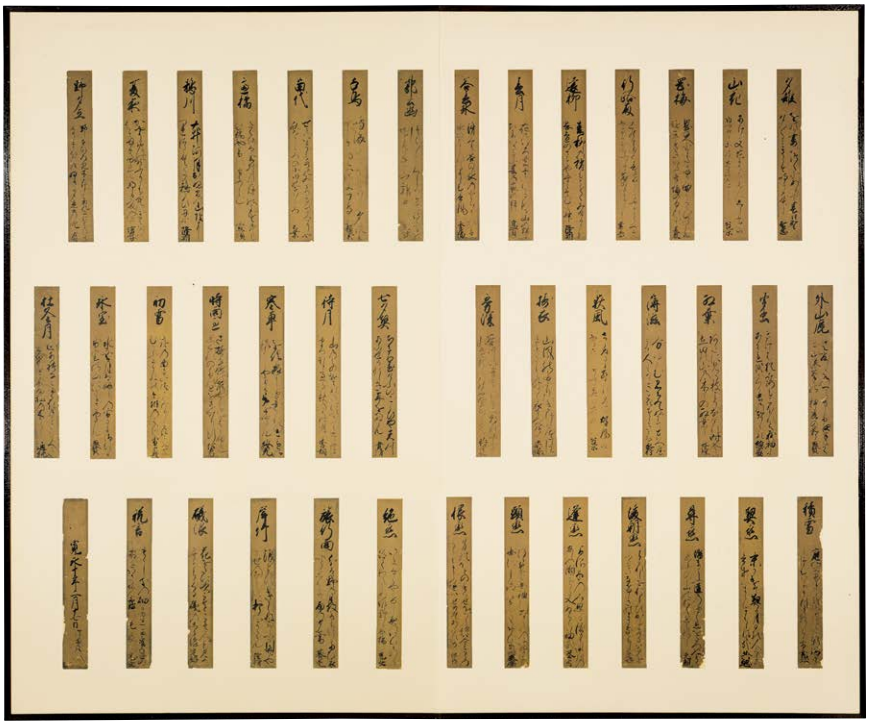
懐紙は、その名の通り本来は懐に入れて手口を拭ったり、メモを書いたりするための携帯用の紙でしたが、十世紀頃から自詠の和歌を記すために用いられるようになります。その大きさは身分や時代によって多少異なりますが、おおよそ縦30センチ、横40～50センチでした。この懐紙を縦に八等分したのが短冊で、十四世紀頃から登場します。

天皇や公家、武家をはじめ、松尾芭蕉や池大雅、さらに夏目漱石や正岡子規など近代文学を代表する文化人まで、懐紙や短冊に染筆された書を通じて、歴史上の人々の人物像を探求します。

八条宮智忠親王



花山院定好



短冊貼交屏風

二曲一隻　江戸時代　寛永10年（1633）　徳川美術館蔵

歌会には、主催者が事前に歌人たちに題を発表し、歌会当日までに和歌を集めて披露する兼題の会と、歌会当日に歌人たちに題を示し、即座に詠んだ一首を披露する当座の会の二種類があった。

本作品は短冊40枚を貼り込んだ屏風で、最後の1枚に「寛永十年二月十七日　御当座」とあるように、寛永10年（1633）2月17日に行われた当座歌会での一座の短冊である。四季と恋・雑からなる組題39首の和歌が書かれており、上から3分の1に書かれた題は「寛永十年…」と書かれた一枚と同一人物の筆跡、和歌は八条宮智忠親王（1619~62）・妙法院宮堯然入道親王（1602~61）をはじめ花山院定好（1599～1637）ら公卿・殿上人ら34名の染筆による。一人一首を原則とするが、一人二首詠んだ例もある。

展示室1・2

企画展

ひなを楽しむ ―旧家のひな飾り―

古く中国から伝わった三月最初の巳の日に人形を使って身の穢れを水で祓う禊の儀式（上巳の節供）が、江戸時代には三月三日に雛（人形）を飾って女児の成長を祝うという「雛まつり」になりました。さらにこの行事が普及していくにつれて、内裏雛と調度類、様々な人形（雛）を華やかに飾る行事となったと考えられています。この雛まつりの人気を背景に、江戸時代には様々な大きさ・種類の雛人形が、江戸や上方で、公家や町方の好みを反映しながら製作されました。

本年度は徳川美術館に寄託された「次郎左衛門雛」を特別公開いたします。京都の人形師・雛屋次郎左衛門が製作したといわれるこの雛は、まるで物語絵に出てくる貴族のような丸い顔に、小さな口と細い目元（引き目）、小さな鼻（鉤鼻）が特徴で、江戸時代中期頃に登場したとみられています。古雅な面差しはとりわけ大名家や公家の間で愛されたようで、公家・大名家や門跡尼寺（皇族・貴族の子女が入寺する寺院）に伝わる作品も知られています。本企画展では「次郎左衛門雛」のほか庶民の間に普及していった「享保雛」・「古今雛」など、江戸時代から昭和にいたる様々な雛を展観いたします。

次郎左衛門雛
江戸時代　個人蔵

享保雛
江戸時代　徳川美術館蔵
江戸時代・享保年間（1716～36）頃に登場したといわれる、町方を中心に人気を博した雛。

徳川慶勝の襲封とその背景

「痛切なる藩論」？

尾張徳川家十四代当主の慶勝（慶恕）は、幕末維新期の尾張藩を導いた藩主であり、写真術を愛好した「写真家大名」としても知られている。その慶勝の生家は尾張家ではなく、尾張家二代光友が二男義行につくらせた分家・高須松平家である。分家出身の慶勝が尾張家を継いだ背景には、どのような事情があったのだろうか。

この点について、尾張藩政史の古典ともいえる『名古屋市史』政治編第一（一九一五年）は、慶勝を待望する「痛切なる藩論」が容れられた結果だとしている（二〇七頁）。これは次に見るような藩政の動向を踏まえてのことである。

「押し付け養子」批判と秀之助待望論

尾張徳川家は寛政十一年（一八〇〇）に九代宗睦が没したのち、初代義直から続く血筋が断絶した。その後、十代斉朝、十一代斉温、十二代斉荘、十三代慶臧と将軍家の血筋からの養子が四代続いた。これに対して国元の藩士たちは、一部の門閥層が、養子の藩主を担ぎ上げて藩政を専断しているとして、強い不満を抱いていた。

彼らの不満は斉温の死去直後、幕府の上使により田安斉荘の襲封が確定した天保十年（一八三九）に噴出した。彼らは斉荘の養子に高須松平家嫡男の秀之助（のちの慶勝）を迎えて次期当主に据えるよう求めたのである。この願いは容れられなかったが、批判を浴びた付家老成瀬正住は居城犬山への引き籠りを余儀なくされるなど、藩を揺るがす大騒動となった。

このように、秀之助は国元の藩士たちから大きな期待を受けていた。だが、実は高須家もすでに直系が途絶えており、秀之助の父義建と母規姫はともに水戸徳川家の血筋であった。にもかかわらず秀之助が期待された背景には、叔父にあたる水戸徳川家九代斉昭（規姫の異母弟）の存在があった。秀之助擁立派が付家老竹腰正富に提出した意見書には、斉昭への直訴をひとまず思いとどまった旨が記されているのである（『名古屋市史』政治編第一、五九六頁）。

斉昭は文政十二年（一八二九）、将軍家からの養子候補を退けて水戸家を継ぎ、門閥層の抵抗を排して大胆な藩政改革を推し進め、幕政にも積極的に意見していた。その姿は、「押し付け養子」と門閥層の専横を批判する尾張藩士たちにとって、理想的な主君にみえたであろう。

『名古屋市史』への疑問

以上の経緯をみれば、『名古屋市史』の説明は妥当に思える。幕府は度重なる押し付け養子による尾張藩内の抗争再発を懸念して、ついに義恕（秀之助から改名）を待望する「痛切なる藩論」を容れたのだ、と。この点は、平成十一年（一九九九）に刊行された『新修名古屋市史』第四巻でも踏襲されている（八一四頁）。

だが、こうした待望論が幕閣の判断に影響を及ぼしたことを示す史料を、新旧『市史』は示していない。それはあくまで前後の状況からの推測であり、義恕の襲封に至る過程を具体的に明らかにしているわけではないのである。

そこでここでは、『愛知県史』資料編21（一一七～一二二頁）で紹介された「尾張藩重臣文書」（名古屋大学文学部蔵）中の尾張藩年寄衆の書簡によって、この点を再検討したい（以下、〈　〉内は『愛知県史』の史料番号）。

将軍家の血筋を維持したい年寄衆

尾張家十三代慶臧の病が重篤になっていた嘉永二年（一八四九）四月、江戸の年寄衆は継嗣決定のため幕閣との協議をはじめた。慶臧はわずか十四歳、婚姻前でもちろん実子はいない。そこで年寄衆は「御威光」を維持するため、これまで通り将軍家周辺から跡継を探した。だが、十二代将軍家慶の男子は世継ぎの家定以外早逝が続いていた。御三卿も、清水家は先に当主斉彊が紀州家に入ったのち当主不在、一橋と田安にも男子がおらず、幕府からはこれ以上手薄になることへの憂慮が伝えられた。また、御三家同

士の養子嗣は前例がなかった〈83〉。

そのため年寄衆は一計を案じ、十二代斉荘の息女利姫か釧姫と、高須家の五男鎮三郎との縁組を企てた。「庶流」の高須家出身でも斉荘の息女と縁組すれば血筋を維持できるからである〈83〉。それは斉荘の正室貞慎院の望みでもあり、斉荘の「御遺慮」ともされた〈85〉。

このとき高須家嫡子の義恕は、すでに二本松丹羽家の矩姫との縁組が決まっていたため継嗣候補から外れた。また、利姫は慶臧との縁組が決まっていた点（急病で破談）が難となり、鎮三郎の結婚相手は釧姫に絞られた〈85〉。

一方、隠居の十代斉朝は、一橋慶喜（斉昭七男）か水戸慶篤（斉昭長男）の弟を利姫・釧姫に配偶させることを望み、そうでなければ義恕を望んだ〈84〉。水戸家の男子と義恕を候補に挙げたのは興味深いが、斉荘の息女と縁組させることを第一に望んだ点は年寄衆や貞慎院と共通していた。

伯母と甥の結婚が難点に

だが、釧姫と鎮三郎の縁組には、大きな難点があった。鎮三郎は十三代慶臧の養子となるので、続き柄でいえば伯母にあたる釧姫と婚姻することになってしまうのである。

義理とはいえ伯母と甥の婚姻は不自然であり、年寄衆は前例を探し求めた。そこで持ち出したのが、享保年間の津山松平家において、松平浅五郎の養子又三郎が、浅五郎の姉妹と婚姻する前提で跡を継いだ事例であった〈86〉。

ところが、この事例には大きな問題が存在した。実はこのとき、幕府は末期養子の罰として津山松平家十万石を一旦収公し、新たに五万石を又三郎に下していたのだ〈86〉（新訂増補国史大系『徳川実紀』第八篇、四一六頁）。又三郎は新たに家を立てたということになり、かなり特殊な事例だったのである。

結局、閏四月二十三日朝、老中阿部正弘に呼び出された成瀬・竹腰は、義恕襲封という幕府の内意を伝えられた。幕府は「養方伯母」と鎮三郎の婚姻を問題視し、津山松平家の事例もこのたびの尾張家とは見合わないとして斥けたのである。年寄衆にとって、この結果は「甚残念」であり、貞慎院も「御歎息」した〈86〉。

男子不足の将軍家と御三卿

以上の経緯の大前提は、当時将軍家と御三卿に男子が極めて乏しかったという事実である。かつて田安斉荘に尾張家を継がせたように、田安慶頼（慶臧の異母兄）を尾張家に入れれば、清水家に続いて田安家まで当主不在になってしまう。それを補おうとすれば、玉突き式に跡継ぎ問題が発生する恐れもあったのである。

尾張藩からは釧姫と鎮三郎の縁組を提案されたが、伯母と甥の婚姻はいかにも不自然だ。ことは諸大名の範となるべき御三家筆頭の継嗣問題である。できれば異例は避けたい。

となればむしろ、高須家当主義建か嫡男義恕に継がせる方が無難ではないか。そしてすでに五十一歳と高齢の義建よりは、若年の義恕が望ましいだろう。実際、義建は二年後に隠居している。「痛切なる藩論」を容れたというよりも、こうして選択肢が限定された結果、幕府は義恕を選んだと考えた方が自然ではないだろうか。

以上はあくまで幕府側の史料を欠いた状態での推論であり、ご批正を乞いたい。だが将軍家と御三卿の男子不足という前提を抜きに、この過程を説明できないことは確かであろう。

（学芸員　木村慎平）

羽賀祥二＋名古屋市蓬左文庫編
『名古屋と明治維新』好評発売中！
（風媒社、二二〇〇円）

明治維新から150年。幕末尾張の政治・社会はどのように変動したのか？新史料も用いて、変革期の尾張名古屋の歴史をひもとく。

表紙：鶴の草子（つるのそうし）作者未詳　1冊　29.2㎝×22.3㎝

鶴の草子

本書は、助けた鶴が人間の女性となって現れ婚姻を結ぶという「鶴女房」型の物語を絵本化したものである。作者は未詳、寛文年間（一六六一～一六七三）前後の作品と思われる。『鶴の草子』は、民間昔話の面影を残す室町時代末期成立の「一冊本」系統と、より物語化がすすんだ江戸時代初期成立の「三冊本」系統が知られており、本書は後者の下冊にあたる。三冊本系統の内容は次のとおりである。

猟師に捕らえられた鶴を助けた主人公の男・宰相は、翌日現れた美しい女と契り、その持参金で裕福に暮らしていた。ある時、女を奪おうとする守護の宮崎が軍勢を率いて攻め寄せてくるが、女の不思議な力によって撃退される。その後、宰相を極楽のごとき隠れ里に案内した女は、自分の正体がかつて命を救われた鶴であることを告げると、来世での再会を約束し飛び去った。女はやがて三条内大臣の娘・玉鶴姫へと転生し、不老の身となった宰相と再会。結婚した二人は子宝に恵まれ、末永く幸せに暮らした。

このような短編の物語草子は、室町時代から江戸時代前期にかけて流行し、「奈良絵」と呼ばれる彩色の挿絵をともなって人々に親しまれた。ことに江戸時代前期には、絵巻・絵本を商品として扱う「絵草紙屋」が、詞書筆者（筆耕）と絵師に仕事を割り振り、詞と絵を統合してひとつの作品に仕上げていた。絵草紙屋は、当時豪華本を嫁入りの際の調度品としていた大名家や、裕福な商人の依頼を受け、絵本・絵巻を制作したのである。

本書も絵草紙屋によって、嫁入本の類として制作されたものと考えられる。挿絵の筆致は丁寧で、霞や着物の文様に金を贅沢に用いている。詞書は、同時期の豪華な絵本・絵巻にまま見られる筆跡と同じ手であり、豪華本を扱った絵草紙屋の商品であったことがうかがわれる。嫁入本には祝儀性のある内容が好まれたが、不老長寿・一家繁昌の結末を持つ『鶴の草子』は、嫁入本としてふさわしいものであったと言えよう。

蓬左文庫には、名古屋の近世文学研究者である尾崎久弥（一八九〇～一九七二）の蔵書として寄贈された。尾崎久弥は、浮世絵や絵入り本など、江戸庶民文芸のコレクターとしても知られた人物である。本書に附属する尾崎直筆のメモには「伝藩老渡辺氏旧蔵」とあり、尾張藩とのつながりが示唆されている。下冊のみの残欠本でありながら、江戸時代前期の豪華本の風情を十分に伝える作品である。

（司書　末松美咲）

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174

ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス（メーグル）】名古屋駅前11番のりば名古屋駅発着で平日30分～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行、④「徳川園・徳川美術館・蓬左文庫」下車徒歩1分

【市バス】名古屋駅前10番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「三軒家」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

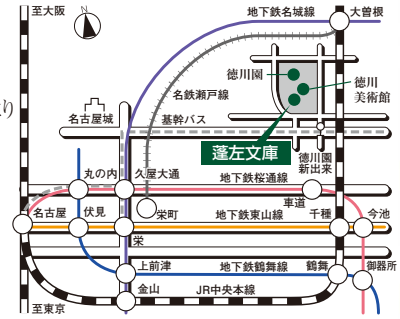
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車③番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分120円）をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※催事により変更することがあります。

12月17日(月)～1月3日(木)は特別整理・年末年始により休館します。

■展示室／有料　一般：1400円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

平成31年1月4日(金)～2月3日(日)の一般の入館料は1200円となります。

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料　館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

蓬左文庫 Facebook

「蓬左」第96号　☆平成30年11月20日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料4,000部　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）

※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。